

# 『黒漆宝尽漆絵螺鈿書見台』修理報告

安里成哉<sup>1</sup> 土井菜々子<sup>2</sup>

## I. はじめに

本資料は、一般財団法人沖縄美ら島財団所蔵の『黒漆宝尽漆絵螺鈿書見台』である。

令和3年4月23日より令和4年3月31日まで沖縄県立博物館・美術館修理修復室内の琉球漆工藝舎にて修復が行われた。修復にあたっては、安里成哉を担当職員とし、土井菜々子を修復責任者兼担当者とした。

## II. 修理報告

### 1. 名称

黒漆宝尽漆絵螺鈿書見台



### 2. 員数・法量(mm)

寸法:595.0×206.0×高 550.0

### 3. 資料概要

木製、総体黒漆塗りの書見台。書見板に朱塗りの組子細工を嵌め込む。基台部分に立てた二本の支柱の間に腰板を挟み込み、支柱に書見板を取り付ける構造で、各部の取り外しが可能。書見板は、亀甲花菱を四隅に螺鈿で描き、窓枠内に吉祥文様が漆絵や蒔絵で描かれる。支柱は、七宝繫文と花唐草が螺鈿で描かれる。腰板は、七宝菊菱文様に削り抜き、縁に螺鈿を施す。上部は七宝繫文。基台は、七宝繫文、亀甲花菱、花唐草、吉祥文様が螺鈿で描かれる。また、各パーツは、側面や入角に金箔が施される。

---

<sup>1</sup> 一般財団法人 沖縄美ら島財団 総合研究センター 琉球文化財研究室 琉球文化財研究係 係長

<sup>2</sup> 琉球漆工藝舎 代表

#### 4. 損傷状態

薄葉紙の繊維が僅かに付着する。茶色い液体のようなものが染み出た跡が数カ所に見られる。資料全体に汚れが被さり、漆塗膜は艶を失っている。さらに、亀裂や塗膜剥離が全面に見られる。貝の剥離、剥落も著しく進み、大変危険な状態である。書見板に嵌め込まれた組子細工は、木地接合部の損傷により、塗膜剥離、剥落が進む。

支柱(右)の上部、書見板を差し込む部分は、木地に亀裂が入り、過去に木工用ボンドのようなもので接着されている。組立式のため、腰板を差し込む溝や支柱を立てる穴などに埃が溜まる。

過去に修理が複数回行われており、その際に使われた胡粉下地や砥粉下地、合成接着剤、塗料などが所々に見られる。

#### 5. 修理方針

現在、我が国で行われている指定文化財漆工芸品の保存修理に則り、現状保存修理を原則として行う事とする。修理に際しては、充分に事前調査を行い、傷み等の現状を確認した上で修理工程を決定する。また、写真撮影を伴った修理の記録を取り、修理後と比較できるようにし、修理終了後報告書を作成し提出する。

#### 6. 修理作業

はじめに修理後との比較ができるよう、修理前撮影および現状調査を行った。通常は、まず塗膜汚れを取り除くためのクリーニングを行うが、本資料は、動かす度に螺鈿や塗膜が剥落するほど危険な状態のため、大きな埃の塊の除去(図1-1)や、加飾のない比較的塗膜の安定した部分のみ拭き上げた(図1-2)上で螺鈿押えを行った。同時に最低限、動かすことのできるよう、剥離した塗膜および螺鈿は、でんぷん糊をふくませた雁皮紙による仮止めを行った(図2)。



図 1-1 埃の塊



図 1-2 クリーニング

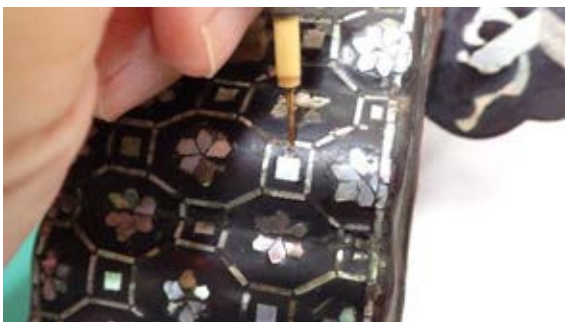


図 2 雁皮紙による仮止め

螺鈿接着は、薄貝の下に漆が入り、色が変わるのを防ぐため、膠を使用した。作業は、湯煎にかけて柔らかくした膠液を剥離した貝の下に流し込み、クランプや木枠と竹ヒゴを用いて固定させ接着した(図3-1, 3-2)。貝を押えると同時に貝周辺の塗膜の接着も行った。

これにより、固くなった塗膜が水分を含み、柔らかくなる効果も得られる。但し、塗膜に水分を与え過ぎると塗膜剥離が進行する可能性があるため、注意を払いながら行った。

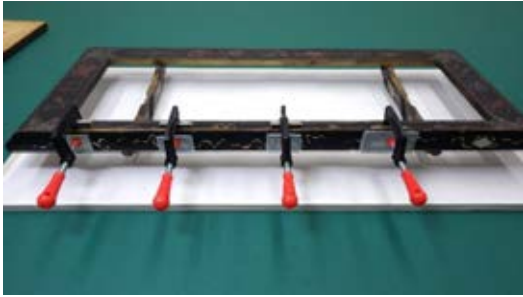


図 3-1 クランプによる貝押さえ

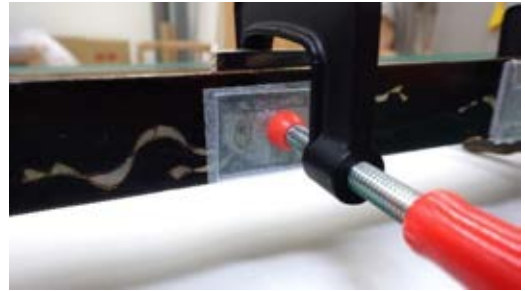


図 3-2 クランプによる貝押さえ 部分

ある程度貝が安定した後、木地構造の接着を行った。腰板は、複数の木地亀裂に溶剤で希釈した麦漆を流し込む。溶剤が揮発し、漆に粘度が出てきたところでハタガネによる固定を行なった（図 4）。同時に塗膜剥離部分にも麦漆を流し込みクランプによる圧着を行なった（図 5）。組子細工の構造の亀裂、書見板の木地亀裂にも同様に麦漆を含浸し、クランプによる接着を行った。

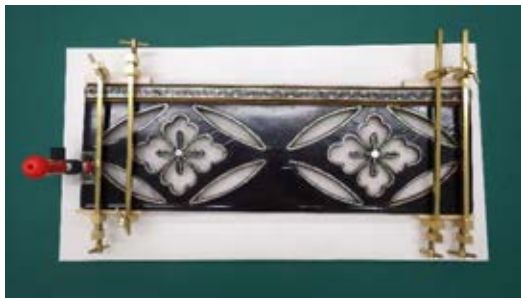


図 4 ハタガネによる押え

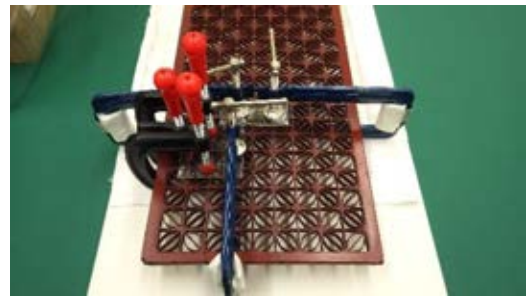


図 5 クランプによる押え

基台の脚都は、過去の修理で曲がって付いており、再度接合部に亀裂が入る。亀裂部周辺には、その修理時に下地が厚く付けられていた。これは可能な範囲で除去したのち、再度麦漆による接着を行った（図 6-1, 6-2）。



図 6-1 過去の修理下地除去後



図 6-2 ハタガネによる固定

木地構造が安定したのち、塗膜接着を行った。接着用に調合した麦漆を溶剤で希釈し、剥離した塗膜の下に流し込み、溶剤が揮発し、漆に粘度が出てきたところで、圧着を行った。

貝、塗膜、木地構造が安定した後、再度クリーニングを行なった。基本的には、わずかに湿らせた木綿布で拭き上げるが、油分を含んだ汚れは、エタノールを用いて除去した。各部の汚れ具合は、異なるため、全体のバランスを考慮しながら行った（図7-1、7-2）。



図7-1 クリーニング



図7-2 クリーニング

艶を失った漆塗膜には、漆固めを施した（図8）。溶剤で希釈した生漆を塗膜面に塗布し、表面に漆が残らないよう拭き取った。同時に木地が露出した部分に漆を吸わせて補強した。書見板に嵌め込まれた組子細工部は、朱塗りであることを考慮し、透漆を使用した。なお、組子細工の内側はクリーニングのみとした（図9-1、9-2）。

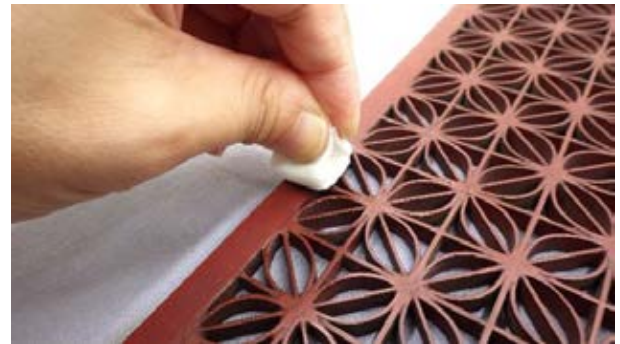


図8 漆固め

木地接合部や塗膜および下地欠損部分は、今後の損傷を避けるため刻苧を充填した。刻苧は、粒子の異なるものを使い分け、数回に分けて作業を行った。



図9-1 クリーニング



図9-2 クリーニング

刻苧が十分に固まった後、刻苧充填部分や亀裂部分には、下地を施した。下地は、表面を砥石や刃物を用いて整えたのち、漆固めを行い、仕上げとした。

最後に、修理前と比較出来るよう、修理後の撮影を行い、報告書を作成した。

## 7. 修理工程

- (1) 修理前写真撮影・調査
- (2) 簡易クリーニング、仮止め
- (3) 膠による螺鈿押え
- (4) 木地構造の接着
- (5) 漆による塗膜押え
- (6) クリーニング
- (7) 塗膜漆固め
- (8) 刻苧充填
- (9) 下地付け
- (10) 修理後写真撮影
- (11) 報告書作成

## 8. 修理場所

沖縄県立博物館・美術館内修理修復室

## 9. 修理期間

令和3年4月23日～令和4年3月31日

## 10. 所見

2本ある支柱の左側は、軸がねじれており、組み立てる際に書見板が完全におさまらない。そのため、過去に支柱の上部が折れており、合成接着剤による接着が行われていた。本修理では、これは無理に除去せず、いずれ合成接着剤の劣化が進み外れた時に、再度漆による修理を行うことが望ましいと判断した。

修理前修理後写真



全景 修理前



全景 修理後



書見板 修理前



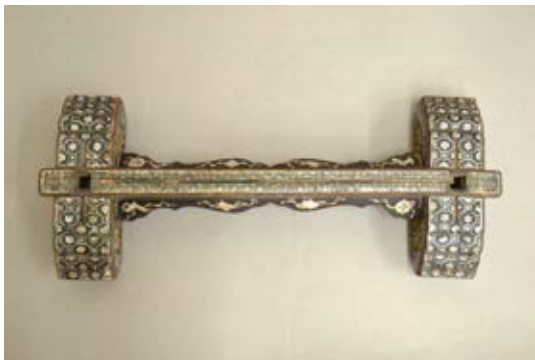
書見板 修理後



腰板 修理前



腰板 修理後



基台 修理前



基台 修理後



書見板 修理前



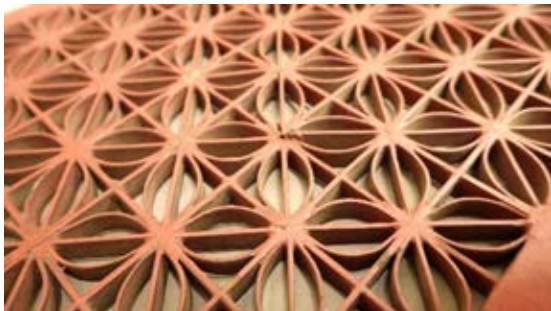
書見板 修理後



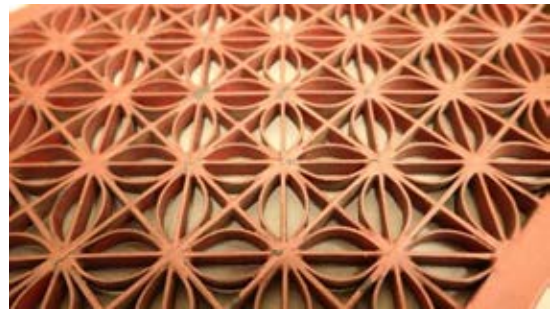
書見板 修理前



書見板 修理後



組子細工 修理前



組子細工 修理後



支柱 修理前



支柱 修理後



基台 修理前



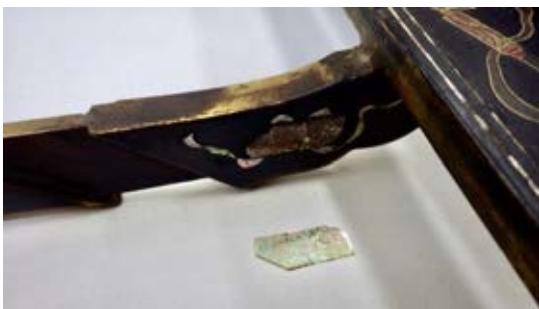
基台 修理後



基台 修理前



基台 修理後



書見板螺鈿 修理前



書見板螺鈿 修理後



脚塗膜剥離 修理前



脚塗膜剥離 修理後